17．コロンブス

コロンブスもこの“魔のトライアングル”内の海域を航行したのは間違いないことです。超常現象ですから常時起きる訳ではないので、4 回の航海ですから往復 8 回に及ぶ探検航海中異常はなかったのでしょう。これは世界で初めて航海日誌を書いたのがコロンブスですから、もし何か異常が起きていたら記録していたでしょう。これは国王の支援を受けての航海ですから、帰ってから報告を求められるので、日記風に克明に航海中の出来事を記載したようです。

またこの報告書を読んだ国王は他の航海者の航海にも役立つことに気付き、以後航海する場合は必ず記録しておくことを義務付け、それを提出することを求めたのです。

この航海日誌は‘ログブック’と呼ばれています。丸太の本とは奇妙ですが、これは船の速力を測定するのに、船首で木片を海に投げて、その木片が船尾を通過する時間差を測定して計算する方法で、測定する間隔の距離は解りますから簡単に計算できます。

現在でも速力を計測する測定器はログと呼んでおり、これを記録しておくことからログブックと呼ぶようになったのです。 時計の無い時代でも創意工夫で解ったようです。

さて、コロンブスという人物はイタリアのジェノバの人で、ジェノバ駅前に巨大な像が建っており市内の公園にもありました。

名はイタリア語でクリストーフォロ・コロンボ。スペイン（カスティーリャ語）クリストーバル・コロン。英語読みでクリストファー・コランバス。ですが日本語流に‘コロンブス’と呼ぶことにします。 職業は探検家、航海士で商人、この頃は遠隔地へ行って商売をするために船を自ら操縦して出かけて行ったのですが、そこは既知のところばかりではなく、未知の世界をも開拓しようとする意欲に溢れる先進気鋭の商人だったのでしょう。

この当時、シルクロードによってアジアとの交易はあり、莫大な利益を得られる高価な商品を産出していることは良く知られており、商人にとっては是非行ってみたい憧れの所だったのです。しかし陸路、海路とも危険と困難を伴う長途の旅を経なければならない、更に敵対していたイスラム圏を通らなければならないことがネックになって僅かな商品しか流通せず、より高価になっていたわけです。

ですが西回りでアジアへ行こうとの発想はありません。それは地球は丸いという説は古代ギリシャのピタゴラス学派によって「地球球体説」は唱えられていましたが、キリスト教絶対の中世の暗黒時代は全ては「天動説」主体だったのです。 ですからコロンブスが若い頃は地表は平坦であると信じられていたのです。ところが、1474 年イタリア人の地理学者・数学者トスカネットが唱えた「地球球体説」唱えられ、西へ西へと航行すれば、黄金の国ジパングや高度の文明と高価な商品に溢れているカタイ（中国）、香辛料のモルッカ諸島（英語読み）へ到達できるという説が流れ出したのです。この説に刺激され商人コロンブスとしては夢は際限なく膨らんだとことでしょう。

更にドイツの地図制作者マルティン・ベハイムが制作した最新の地球儀に描かれた世界は地中海を中心としたヨーロッパと怪しげなアフリカ、アジアはシルクロードを通っての概略図、勿論新大陸、太平洋はありませんから西回り一番乗りでアジアへ行こうという発想が生まれるのも自然の流れでしょう。

しかもこの地球儀には「ジパングの南端にある大きな島には金と香料をうみだす灌木がおい茂っている」と無責任な解説書まで付いていたのです。この出典は多分マルコポーロの「東方見聞録」ですが、ジパングに関する見聞録は全くの伝聞録と推測にすぎません。

この説を信じたコロンブスは、西回りの航路開拓のアイデアを携えてポルトガルを訪れてジョアン二世に売り込んだが、アフリカ進出に忙しい国王は、この夢想的なアイデアに一顧だにしなかったようです。そこでスペインに移動して、イサベル・フェルナント両王に売り込み紆余曲折を経て交渉成立、「サンタ・フェの協約」が締結されて航海への準備作業が進められたのです。

1492 年 8 月 3 日、旗艦サンタ・マリア号（109t）、ビンタ号（60t）、ニーニャ号（40t）、キャンベル型、三本マスト、三枚のラティーンセール、船団長コロンブス、乗組員総数 120 名（90 名の説もある）を率いてパロス港を出帆、船団は南下しアフリカ、サハラ砂漠の沖合に位置するカナリア諸島へ向かいます。

航海者の最重要課題は動力源である風を読むことです。風を解説しますと、大気の大循環があって、赤道付近で上昇した大気は中緯度で冷やされ下降するハドレー循環があり、これが下層の中緯度高圧帯を形成し、赤道低圧帯へ向かって流れる循環ができます。地球の回転によって生ずるコリオリの力が働き、なだらかな円を描くように風向が変化します。

即ち北東から南西に向かって吹く風になり、これが偏東風です。また、この風を利用して帆船は航走したので「北東貿易風」と呼んでおります。北緯 28°まで南下し見事この風を捉え針路 W で‘ヨーソロー’一路西へ航走開始です。

この風を知り、利用しようとしたのはコロンブスが最初の航海者だと思います。文字通り「コロンブスの卵」であって、最初にやったコロンブスは偉大な航海者だと尊敬します。

しかし航海は平穏無事とはいきません。寄せ集めの乗組員の中には海は平らでその末端は滝になっていると信じているのが乗り組んでいるのですから反乱が起きても不思議ではありません。コロンブスとしても海図のない未知への航海で、想像ではアジアのどこかに到達しているはずなのに、島影一

つない大海原を 50 日も航行を続けたら不安を覚えたでしょう。乗組員はもっと不安で引き返すことを主張し、コロンブスも引き返すことに同意した翌日未明島影を発見したとドラマチックに描かれていますが、真実はどうだったんでしょうか。発見、上陸したのが 1492 年 10 月 12 日です。フロリダ半島の沖合に位置するバハマ諸島の小島に上陸、ここはアジアの一部、インドの東端と推測したのです。しかし香辛料も金も何もない珊瑚礁の島ですから、更に探検する必要があると判断し、乗組員 30 数名を残して引き返します。この帰国の途上、嵐を避けるためにポルトガルのリスボア港に避難し、ここでコロンブスが西回りで「ジパングかカタイの近くに到達した」との超ビックニュースが伝えられ、ショックを受けたのがジョアン二世、これは東回りでインドを目指したディアスが喜望峰を回りながら引き返してきたばかりなので、競争相手のスペイン国王にだし抜かれたので悔しかったでしょう。

一方、スペイン国王は大喜びで、早速アンゴラ出身のローマ教皇アレクサンデル六世に申請書を提出「アゾレス及びヴェルデ岬諸島の西及び南 100 レグア（１レグア＝5.93km）を境界線として、ポルトガルの活動範囲は内側に限定し、その外側をスペインの活動範囲とする」というスペイン国王が絶対有利な教皇勅書を発布させておりますから、この国王の素早い行動は大統領か大商人感覚でしょう。我が国為政者の歴史のように国内だけにしか眼のいかなかった縮志向とは大分違います。

しかし、ポルトガルが猛烈な巻き返しを計り、1494 年 トルデンシャル条約を締結して一件落着になるのですが、世界にとってはとんでもない不幸の始まりです。この内容はヴェルデ岬諸島の西 370 レグア（2194km）の子午線を境界線として、その東側はポルトガルの勢力範囲、西側はスペインの勢力範囲とするという協定で、世界を二分割して全て植民地にしようとする協定に対して教皇勅書を発布するのですから「力こそ正義」と信じていたのでしょう。

この境界線は西経 46°37′の子午線で、これを延長すると東経 133°23′になり、もし我が国に防衛能力がなかったらこの子午線は広島県福山市付近を通るので四国も新居浜辺りで二分割され西側はポルトガル、東側はスペインの植民地になっていたかもしれないのです。

大航海時代を経て欧米列強の植民地獲得の略奪時代に入り、アフリカ、アジア、中、南アメリカ、カリブ等全てが植民地に分割され第二次大戦終結まで続くのですから歴史は人間の不遜、傲慢、愚かさを教える最高の学問でしょう。ちなみにアジアで植民地の被害を受けなかったのはタイと日本だけです。ただし我が国は欧米をまねて植民地獲得へ狂奔し手痛いしっぺ返しを受けております。

さて、コロンブスは第二回の航海は 1493 年 9 月、17 隻の船に植民地に向かう人達を含め 1700 人が乗船し出発したのです。しかし残してきた 30 数名の乗組員達は現地人とトラブル続きで、お互いに殺し合い、結局 全員が惨殺されていたので、急遽別な場所に上陸して植民地にしようとしたのですが、黄金の国や香辛料の島と過大な夢に膨らんできた人達にとっては何にもない珊瑚礁の島に満足するわけがなく、コロンブスはつるしあげられる騒ぎになったようで、決して成功とはいえないものがありました。

第三回は 1498 年 5 年で、やや南に針路をとり南米のベネズエラ付近に上陸、オリノコ河を遡上し淡水であることを確認しておきながら、大陸であることを認めず、アジアの東端の島だと主張したので

すからどうしてもインドの東端の島だと信じたかったのでしょう。

第四回は 1502 年の 5 月ですが、スペイン国王は熱も冷め、小型のボロ船 4 隻と僅かな資金だけでしたから、途中遭難して救助されてやっと帰国し、経済的にも恵まれず 1506 年静かにこの世を去っております。

新大陸発見の栄誉はイタリア、フィレツェの人で探検家であったアメリゴ・ヴェスブッチが「コロンブスが発見する 1 年前に到達し、そこは新大陸である」との虚構の書簡を 1503 年に発表したのに基づき、ドイツの地図制作者であるマルティン・ヴァルト・ゼーミュラーが伝聞と想像で描いた新大陸のある世界地図を 1506 年に発表、新大陸の名を「アメリカ」と命名したのです。これはアメリゴのラテン語の読みがアメリカだからです。

コロンブスは 多分この事実を知らないままこの世を去ったのではないでしょうか。

コペルニクスが「地動説」を公にしたのは 1510 年ですからコロンブスの死後になります。